

蜘蛛の巣は住み着いて

作——秋野あきえ

外は小雨が降っていた。私の心は今日なんだか湿っぽい。梅雨はどうにも好きになれない。

気晴らしに彼女の家を訪ねてみて、とりあえず成り行きでやってみた。少しの多幸感に包まれて眠る。目を覚ましたら、いつの間にか外の雨は止んだらしい。

毛布は見事に剥がされていて、私達は部屋の灯りに情けないくらい照らされている。私はそれでも身動きが取れない。蛇のように体をくねらせ巻きつけるように足を絡ませている。それは彼女——常盤咲子のいつもの癖だ。

「……ねえ、麻子？」

目をカッと見開いて、気味の悪い笑みをたたえながら地の底から這い上がるような、しかし小声で囁きかける。

蛇だ。それも、超猛毒の。一度でも噛まれたら即死しそうな。ゾクツ、と寒気がした。でも私は、その波に飲まれたい。

くの字になり頬を高揚させたまま荒い息をしている。シートに汗が染みているのがわかる。そんな私を楽しそうに眺めている咲子が正直うらめしいとも思う。

常盤咲子は突然私に訊いた。

「……麻子はさ、あたしで、何人目？」

私は体をぶるっと震わせた。どういふ風の吹きまわしか。別れ話でも切り出されるのか。それでも比較的濃厚な私は、微笑んで言っ

た。

「初めて会った時も、あんたは質問攻めばかりして私を困らせたんだっけ」

覚えていないのか、はたまた記憶が飛んだフリをしているだけなのか。彼女はひたすらはてなマークを浮かべていた。

\*

それはちよつとした出会いを求めて。どこかの偉い人が主催のパティーに参加したことがきっかけだった。もはやレスピアン専門と化した賑やかなカフェで、私はひとり椅子に座って、少し格好付けて一人物静かにコーヒを啜っていた。

それはまさに静寂を切り裂く、という言葉がびつたりだった。

「あ、いい子みっけー！」

やたら元氣そうにいきなり私の側にきて、声を掛けてきたのが咲子だった。

髪の毛はこれでもかというほどショートカットで、服はどこから調達してきたのか、カラフルな緑色のダツフルコートにみるからに寒そうなパールの透けタイツ。そして上等なトイカメラを重そうに担いでいた。その姿はとても目を引いたし、個性の粹さえ超えていた。彼女は開口一番に、

「ベリシヨってバリタチ多いんだって。あたしも、その一人なんだけどさ」

私は顔をしかめる。

「……知ってるよ。まあ、いいんじゃない？ちなみに私は、どっちでもいける。」

「名前教えて！」